

# 紛争と暴力の問題が続くコロンビアにおける雇用と若者の自己実現—カリ市の事例

グローバル・スタディーズ研究科 地域研究専攻 博士前期課程  
安江友里

## 1. 研究の背景

コロンビア、バジェ・デル・カウカ県カリ市は、植民地時代からのアフリカからの奴隷の末裔である、アフロ系の人々がラテンアメリカで2番目に多い都市であり、2021年の統計によると住民の24%が自らをアフロ系と自認している。そして、アフロ系の人々のうち74%は最も低い社会階層区分に属し、カリ市東部に位置するアグアブランカ地区に集中している。2021年には、256人のアフロ系の人々が殺害され、10万人あたりの殺人率は47に上り、同時期のコロンビア全体の平均値27よりもかなり高い。また、カリはコロンビアの主要都市の中で17.3%と最も失業率が高い。その中でも特に14~28歳の若者は25.5%、アフロ系の人々は21.9%と、労働市場において脆弱な立場にある。

このような状況の下、2021年4月末、税制改革法案をきっかけに全国的なデモであるパロ・ナシオナル(全国抗議デモ、以下パロ)が発生した。警察や暴動鎮圧機動部隊(ESMAD)が市民に対し過剰な暴力を行使し多数の死者が出た。INDEPAZの報告によると、コロンビア全体の死者75人のうち、43人がカリで死亡している。そのうち、カリで明らかになっているだけでも22人が28歳以下の若者、そして11人はアグアブランカに該当する地区で殺害されている。つまり、これは単なるデモではなく、アフロ系の人々や若者に対する根深く構造的な差別や排斥が関係していると考えられ、カリ、そして特に脆弱な状況に置かれている若者に着目するに至った。

## 2. 研究の目的

カリのアフロ系の若者が経験している暴力や差別、失業といった困難な状況下で、彼らがどのように教育及び雇用の機会や自己実現を達成していくのか、また彼らにとって自己実現とは何かを明らかにすることを目的としている。

これは、①彼らが乗り越えなければならない、社会が規定する「問題」としての若者像(ステレオタイプ)やスティグマ、アフロ系であることから経験する抑圧構造や排斥を分析し、②それに対し若者がどのようにその現実を捉え、進路の選択や人生設計を行なっていくのか、という二段階で明らかにする。

## 3. 調査概要

2023年8月2日から9月6日にかけてコロンビア、バジェ・デル・カウカ県カリ市に滞在した。本調査は、①上述のように、カリ市において、アフロ系の若者が経験している暴力や差別、失業といった困難な状況下で、彼らがどのように社会が規定する「問題」としての若

者像やスティグマを乗り越え、教育や雇用の機会の獲得や自己実現を達成していくのか、そして彼らにとって自己実現とは何かを明らかにすること、②パロに関し、抵抗の拠点の訪問や参加した若者から話を聞き、パロを通してカリ市の歴史や現状、若者がどのように社会を捉えているのかを知ることでもカリ市滞在の大きな目的であった。

なお、計画段階ではアフロ系の若者に焦点を置いていたが、アフロ系の人々が多く住む市内東部の大衆居住地区だけでなく、市内西部の丘陵地帯に位置する大衆居住地区の訪問する機会を得られた。そのため、アフロ系の若者に限らず、脆弱な状況に置かれている上述の2つの大衆居住地区の若者へのインタビューを中心に調査を実施した。

## 2. 調査内容

### ①研究者への聞き取り

西部自治大学(Universidad Autónoma de Occidente)、ハベリアナ大学カリ校(Universidad Javeriana)の大学教授、合計 8 人と面談を実施した。若者や貧困地区だけでなく、教育、歴史、人種差別など多岐にわたる分野の研究から助言をいただくとともに、フィールドとした2つの大衆居住地区で活動をしている団体や、関係者の紹介もしていただいた。そのほか、カリ市渡航前に首都ボゴタの CINEP (民衆教育研究センター) においても面談を実施し、パロやカリ市の歴史に関する情報収集を行った。

### ②団体の訪問

- Fundación Créalo：若者の進学支援、映像制作などの文化活動。
- Museo Popular de Siloé：記憶、物の保存。2021 年のパロに関する展示。
- Semillas Siloé：ダンス、演劇などを通じた子どもの居場所作り。
- Nuevo Estilo Dance：子どもや若者への無料ダンスレッスンを実施。
- Pastoral Afro：カトリック教会の福音宣教活動。主にアフロ系コロンビア人の支援。
- Casa Cultural el Chontaduro：子ども、若者の支援、民衆教育を実施。
- Pre-Icfes：大学進学のための受験勉強のサポートを実施。

大衆居住地区で活動をしている、以上 7 つの団体を訪問し、参与観察と創設者や参加者の若者への聞き取りを行なった。

### ③若者へのインタビュー

24～32 歳の若者 6 人にインタビューを実施した。いずれも大衆居住地区に在住、またはそこで開かれていた活動や団体に参加した経験をもち、現在は自らも何らかの取り組みを持っている若者を対象とし、彼らのライフヒストリーと現在の活動に関する話を中心に聞き取った。

#### ④2021年のパロの抵抗の拠点の訪問

- Puerto Resistencia (プエルト・レシステンシア)  
：アグアブランカ周辺にある抵抗の拠点。現在はコミュニティ食堂を仕切っていた母親がパロをテーマにした手工芸品を販売する店や、握り拳を突き上げた形のモニュメントがある。パロのマーチやコミュニティ食堂の取り組みに参加していた若者や母親に聞き取りを行なった。
- Siloé (シロエ)  
：丘陵地帯の大衆居住地区の地域の一つで、ヘリコプターから銃撃を受けるなど、激しい対立が起きた拠点。パロ・ナショナルで警察によって息子を暗殺された家族と、当時の状況や記憶を巡るツアーに参加し、市内中心部の駅から、丘陵地帯の上部まで、その時何がそこで起きたのか話を聞きながら歩いた。そのほか、Museo Popular de Siloé (シロエ民衆資料館) で、遺品や展示の閲覧をした。
- Loma de la Dignidad (ロマ・デ・ラ・ディグニダ)  
：音楽やアート、図書館の建設などを通じ、文化的な抵抗を試みた拠点。学生が運営に関わっている図書館に訪問し、学生からの聞き取りや、写真などの資料収集を行なった。

### 3. 調査結果 (明らかにしたこと)

#### ①進学、就職の困難について

上述の Fundación Créalo や Pre-Icfes という団体での聞き取りや、若者へのインタビューを通じて、若者が実際に経験してきたことの中に、大学進学や就職の困難があることがわかった。進学においては、学費だけでなく、進学できたとしても交通費が払えない、といった地理的な要因も関わる経済的な状況から学業の継続が難しいことや、「アフロ系である」ことからクラス内で仲間外れにされたり、グループワークから排除されたりすることで成績に影響が出てしまうといった経験を聞き取った。また、進学したくても ICFES という全国共通のテストの成績が足りず、何年も不合格を繰り返し、進学を諦めた若者にも出会った。彼らはその要因として、当該地域における教育の質の低さや、私立学校との格差、学習環境に言及していた。また、就職に関しては、履歴書の住所をただで採用を見送られた経験を聞き取った。このように、その地域に住んでいるということや、「アフロ系である」ということによる差別や困難は現在も続いており、特に脆弱な状況に置かれている大衆居住地区の若者の思春期や青年期に痕跡を残す出来事となっていることがわかった。

#### ②若者の自己実現について

計画段階の仮説において、暴力や差別の困難な状況下に置かれた若者の自己実現には、進学や労働市場への参入以外にも見出しうるゴールや、彼らにとっての自己実現があると想定していた。実際にインタビューを通じて話を聞くと、彼らの中には労働市場に参入する選

択肢がありながらも、自らそれを選ばず、インフォーマルセクターで働きながら子どもとの活動やボランティアで観光業に従事するなど、自分が信念を持ってやりたいと思っていることやその取り組みを自分の人生設計や自己実現の主軸に置いている人が少なくないことがわかった。そして、その背景にはアフロ系であることや、その地域の出身であることから経験した困難があり、それが彼らの選択や人生設計、そして自己実現につながっていることもわかった。

また、渡航前は『彼らがどのように社会が規定する「問題」としての若者像やスティグマを乗り越え、教育や雇用の機会の獲得や自己実現を達成していくのか』という問いを立てていたように、彼らの自己実現の過程には困難を「乗り越える」過程があると想定していた。しかしながら、実際に話を聞くと、彼らの人生設計や自己実現とは、暴力や差別などを乗り越えた先にあるのではなく、その困難やスティグマに対峙していく過程にそれらを位置付けていることが明らかになった。

### ③2021年のパロについて

参加した若者は、「自分がここ(モニュメントや壁画)に描かれる1人になっていてもおかしくなかった。そこにいたというだけで誰だって暗殺されたかもしれない。」と語った。その地域だから、若者だから、ただそこにいたから、それだけの理由で暗殺されてしまう状況であったことが伝わった。また、ツアーの中で聞いた「(激しい抵抗の拠点となり、若者が暗殺されてしまったのは)なぜならここだから、シロエだから。ここが、貧困地区で、周縁化されているから。スティグマタイズされているから。」という言葉から、2021年のパロは特に大衆居住地区が抱えるスティグマや脆弱性が可視化した出来事だったことがわかった。

また、複数の若者への聞き取りを通じ、パロのマーチやコミュニティ食堂を通し、社会的な活動やリーダーシップをとっている若者同士が知り合い、現在も継続的に互いの活動を通して交流、協力しており、パロがリーダの若者同士が会う契機となっていたという視座も得られた。

## 4. おわりに

本研究は、2023年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金の受給によって実現しました。指導教員である幡谷則子先生、田村梨花先生のご指導及び、事務手続きにおいてご尽力いただいたグローバル・スタディーズ研究科事務室の佐能さまをはじめとする多くの方に支えに深く感謝申し上げます。